

Reconsidering Trap Pits during the Middle Age in Japan: As for New Cases in the eastern Foot of Yatsugatake Mountains

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Sakurai, Hideo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00061624

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



中世陥し穴の再検討 —八ヶ岳東麓における新事例—

櫻井 秀雄

(長野県埋蔵文化財センター)

1 はじめに

陥し穴には中世に位置づけられるものもあることを私が認識したのは、長野県埋蔵文化財センターから原村教育委員会へ派遣されて平成9(1997)年に担当した長野県諏訪郡原村の南平遺跡での発掘調査においてであった。八ヶ岳南麓に位置する本遺跡から発見された縄文時代の陥し穴とは形態が異なる陥し穴の底面に残った逆茂木について放射性年代測定を行ったところ、15世紀後半～17世紀前半という中世から近世初頭に比定される年代値が得られたのである(櫻井1998)。

この調査をきっかけとして私は類例の収集を行い、こうした中世陥し穴が八ヶ岳南麓には他にも分布していることがわかった(櫻井2000)。『金沢大学考古学紀要』28号に掲載された論文「八ヶ岳南麓の中世陥し穴」において集成を行った段階では12遺跡43基の中世陥し穴を数えるに至った(櫻井2006・以下、旧稿という)。

その後、山梨県清里バイパス第1遺跡でもすでに中世陥し穴の存在が指摘されていたことを知り、八ヶ岳南麓での事例が1つ増えたことになった(櫻井2011)。

そして、平成25(2013)年には長野県南佐久郡南牧村の矢出川第Ⅷ遺跡でも中世陥し穴が確認され、八ヶ岳東麓でもこの中世陥し穴が分布することが判明した。

そこで、本稿では、旧稿で触れられなかった山梨県清里バイパス第1遺跡と八ヶ岳東麓で初の発見となった南牧村の矢出川第Ⅷ遺跡の新事例を紹介し、中世陥し穴について改めて検討していきたい。

2 中世陥し穴の特徴

八ヶ岳南麓に特徴的な中世陥し穴の特徴についてはこれまでも指摘してきたが、ここでまとめてみる(櫻井1998・2000・2006・2011)。

①平面形は大型の長楕円形を呈し、長軸方向に比べて短軸方向が極めて狭い。長軸径は約2.5～4m超の範囲にある。

②底面の坑底は、四隅を直角に掘削し、非常に坑底が狭く溝状を呈する。底面は平らなもの他にも、傾斜するもの、段を有するものもみられる。

③壁面には鉄製工具による掘削痕が認められる。

④底面の逆茂木痕は5～6基の場合が多いがそれ以上の場合もある。その埋設方法は、先端を角錐状に鋭く尖らせた逆茂木を打ち込む「南平式打ち込み型」である¹⁾。

これらは縄文時代をはじめとする他時期の陥し穴とは一線を画した際立った特徴である。

また、これらのうち原村の南平遺跡の2基と同村の關盧沢遺跡の1基では炭化した逆茂木の放射性炭素年代測定を行い、いずれも15世紀後半～17世紀前半の年代値を得ている(櫻井1998・平出1998)。

3 山梨県北杜市清里バイパス第1遺跡から発見された中世陥し穴

遺跡は、山梨県北杜市(旧北巨摩郡高根町)清里に所在し、標高は1308m前後をはかる。「念場原」と呼ばれる広大で平坦な高冷地に立地している。平成8(1996)年に主要地方道須玉・八ヶ岳公園線(清里バ

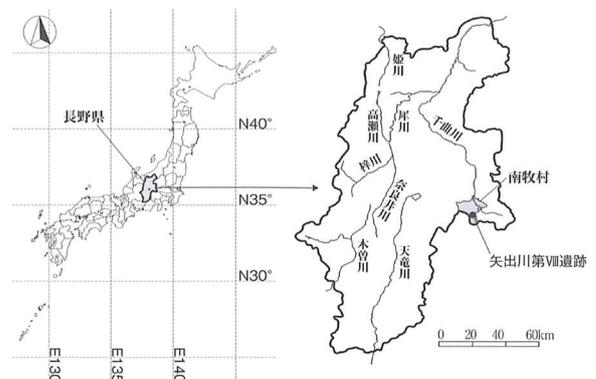


図1 矢出川第Ⅷ遺跡の位置



図2 矢出川第Ⅷ遺跡と清里バイパス第1遺跡の位置

イパス) 建設に伴い、山梨県埋蔵文化財センターが発掘調査を行い、遺構では陥し穴 76 基が見つかった(山梨県埋蔵文化財センター 1997)。そのうちの 67 基は縄文時代のもと考えられるが、中世陥し穴も 9 基みついている。いずれも長楕円形を呈し、床面も細長い楕円形となっている。床面からの壁は直に立ち上がるものがほとんどである。

規模は、5 号陥し穴が長軸 270 × 短軸 130 × 深さ 100cm、27 号陥し穴が 388 × 100 × 100cm、28 号陥し穴が 340 × 100 × 80cm、34 号陥し穴が 384 × 125 × 92cm、35 号陥し穴が 445 × 90 × 110cm、36 号陥し穴が 349 × 88 × 77cm、57 号陥し穴が 352 × 98 × 94cm、58 号陥し穴は 254 × 推定 75 × 115cm、70 号陥し穴は 255 × 86 × 95cm となっており、長軸は約 2.5 ~ 4.5 m の範囲にある。なお、58 号陥し穴は縄文陥し穴を切っている。

いずれも中世陥し穴とみてよい事例である。平成 8 (1996) 年に発見され、報告書でも丘の公園第 5 遺跡と同様に古代以降の所産である可能性が指摘されていた遺跡であるが、旧稿の段階では私の資料収集不足のため遺漏してしまったため、ここに補遺しておきたい。

4 長野県南牧村矢出川第Ⅷ遺跡から発見された中世陥し穴

長野県東部の佐久地方のなかでも最も南に位置し、山梨県と接する南佐久郡南牧村では、昭和 61(1986)年度より佐久地方事務所による県営畑地帯総合土地改良事業が始まり、それに伴う矢出川遺跡の発掘調査も数次にわたり実施されてきた。

中世陥し穴が確認されたのは、県営畑地帯総合柵改良事業南牧村地区農道 6 号改修工事に伴う矢出川遺跡群矢出川第Ⅷ遺跡の発掘調査においてであり、長野県埋蔵文化財センターが平成 25(2013)年度に発掘作業、平成 28(2016)年度に整理作業を行い、報告書を刊行した(長野県埋蔵文化財センター 2017)。

矢出川遺跡は、昭和 28 (1953) 年に地元の考古学研究者である由井茂也氏(故人・元佐久考古学会長)によって日本最初の細石刃が発見された遺跡であり、今回の調査でも旧石器時代の石器 177 点(ナイフ形石器、貝殻状刃器、石刃、石核、剥片等)が出土している。

こうした旧石器時代の遺物が出土するなかで、陥し穴が検出された。この陥し穴は、SK1 と命名された土坑であり、長さ 3.8 m、幅 1.2 m の南北に長い長楕円

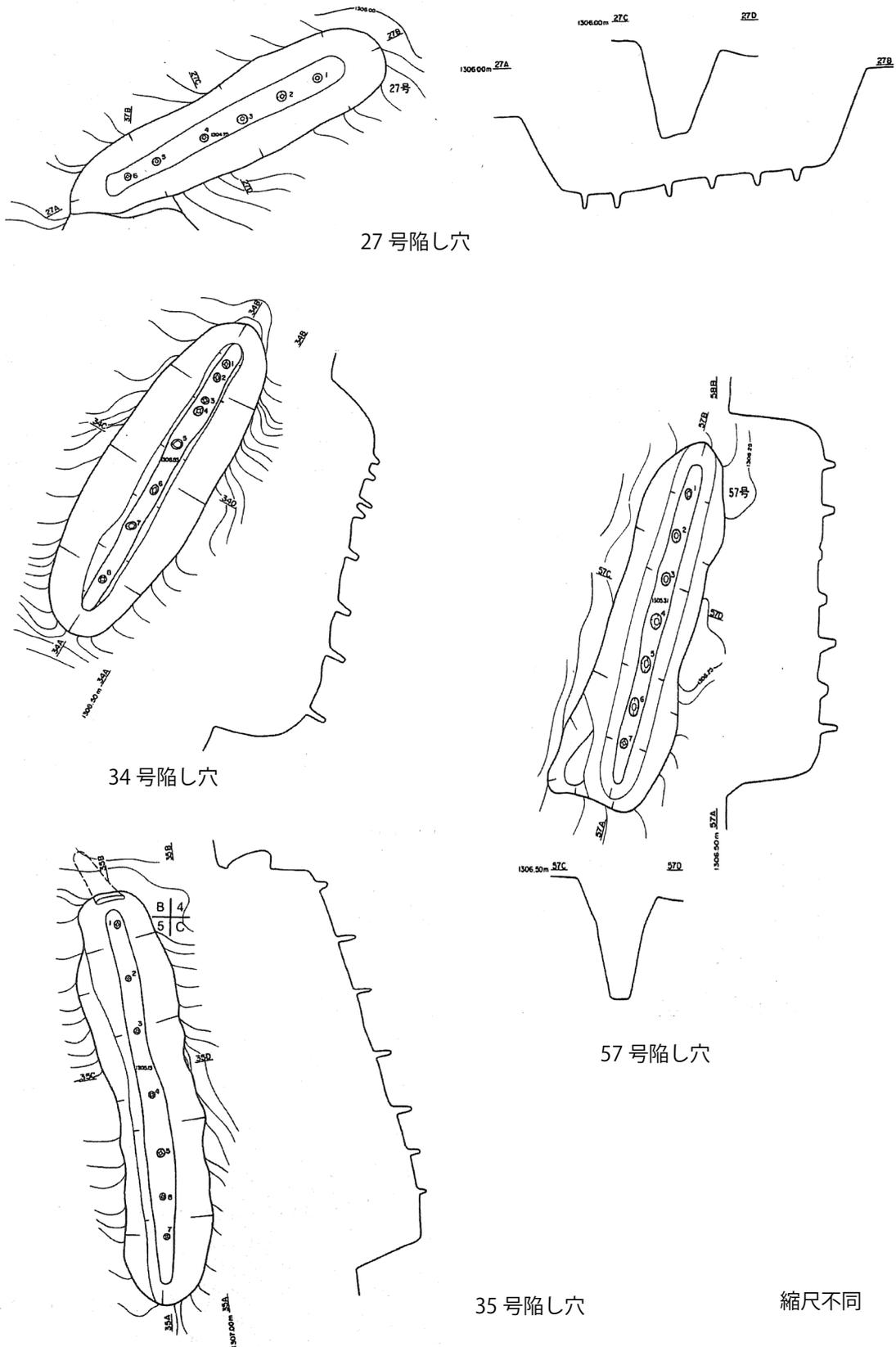


図3 清里バイパス第1遺跡の中世陥し穴

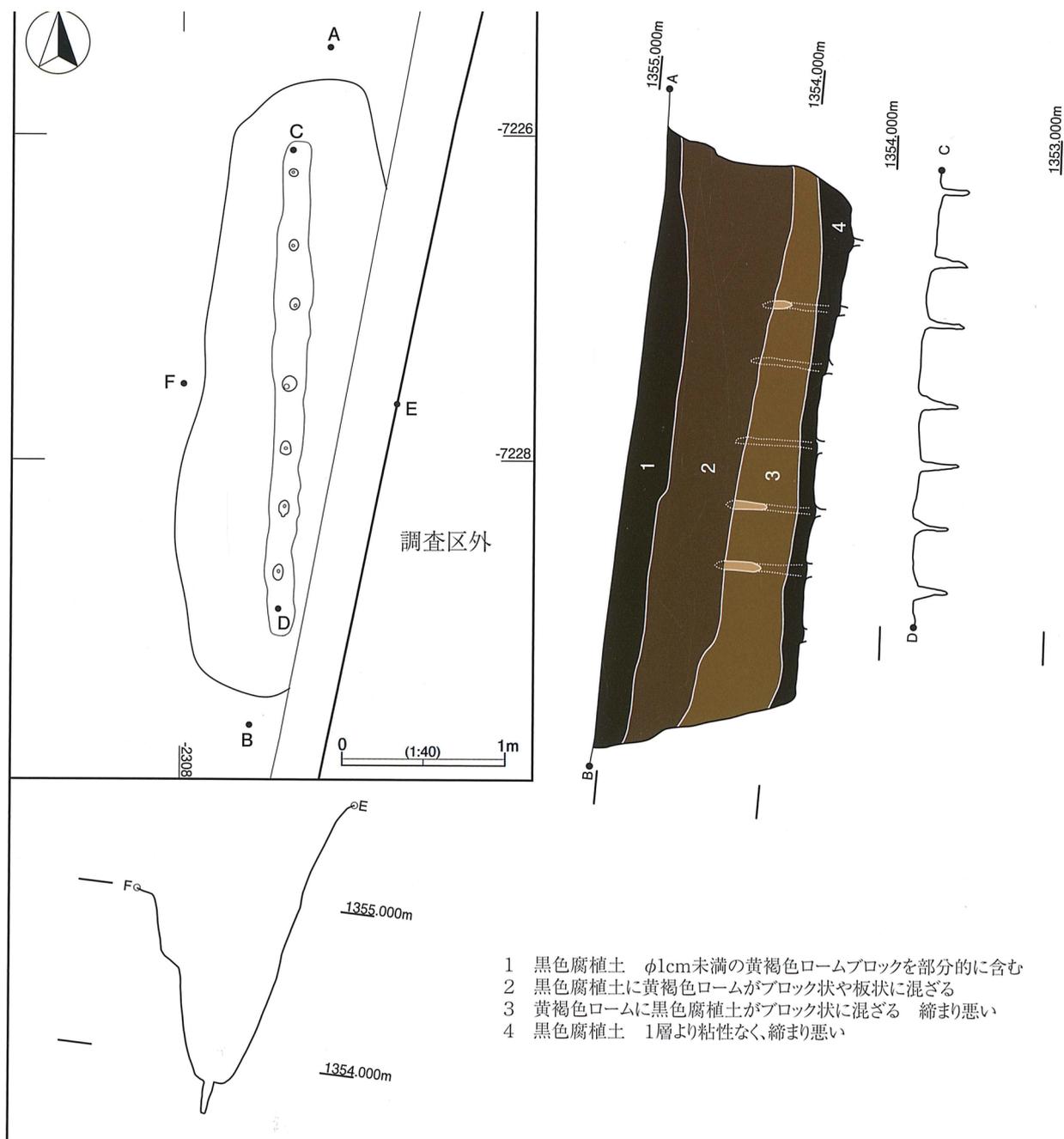


図4 矢出川第Ⅷ遺跡の中世陥し穴

形を呈する。底面は長さ3.2 m、幅0.2 mの溝状。断面形はV字形に近い。埋土は上から1～4層に分けられている。1層は黑色腐食土、2・3層は黑色腐食土とローム層がブロック状または板状に混在し、下層はローム層の比率が高かったという。底面上には有機質で黑色腐食土の4層が堆積していた。底面中央には逆茂木痕が7箇所みられ、40cm程の間隔で1列に並んでいた。逆茂木痕の埋土は黑色腐食土と黄褐色ローム土がブロック状に混在し、直径は約10cm、深さは底面

から約20cmで掘り方はなく、先端は尖っている。一方、Pit 2～6の5箇所では底面から約50cmの高さまで伸びる逆茂木痕が埋土断面で確認された。

Pit 2・6の底部近くからは逆茂木とみられる木材が出土している。これらについては樹種同定と放射性炭素年代測定を行っている。その結果、Pit 6はハンノキ亜属と同定され、Pit 2は広葉樹と同定された。また、放射性炭素年代測定の結果、Pit 2がCALAD1433 - 1446、Pit 6がCALAD1444 - 1445の暦年

較正年代値(1 σ)の値が得られている。15世紀中頃に位置付けられよう。

この他、壁面には幅5~10cm、長さ20~30cm程度の単位で短冊状の掘削痕跡が残されていた。鉄製工具痕とみてよいだろう。なお、遺物は出土していない。

中世陥し穴の新事例となったことに加えて、残存した逆茂木について放射性炭素年代測定が行われ、15世紀中頃という年代測定値が得られた3例目の遺跡ともなった。

5 八ヶ岳東麓での中世陥し穴発見の意義

前記のとおり、八ヶ岳南麓では、馬捨場遺跡、鹿尾根遺跡(以上、茅野市)、南平遺跡・關盧沢遺跡・恩善西遺跡・上居沢尾根遺跡・前尾根遺跡・清水遺跡・芝原尾根遺跡(以上、原村)、机原三本松遺跡・中尾遺跡北地区(以上富士見町)、丘の公園第5遺跡、清里バイパス第1遺跡(山梨県北杜市)の13遺跡で中世陥し穴が発見されている。それに、矢出川第8遺跡(南牧村)で中世陥し穴が確認され、これまでの分布域が八ヶ岳東麓にまで広がっていたことが判明したわけである。

私は旧稿で八ヶ岳南麓における中世陥し穴の分布域は、諏訪社の「神野(御狩野)」にあたるものと捉えた。また、諏訪社では毎年75頭の鹿頭を供える御頭祭をはじめとしてシカを用いる祭礼があり、中世陥し穴の長軸に比べて短軸が極めて細い構造はシカの捕捉するためのものと考えられ、諏訪社の祭礼に伴いシカを狩猟した施設である可能性が高いことなどを指摘した。なお、近年には永松敦氏が、年四度の御狩祭(「押立御狩神事」・「御作田御狩神事」・「御射山祭」・「秋尾祭御狩」という狩猟神事を行うためには草原を維持する必要があったことや中世諏訪神社では稲と鹿が最高位の贄として同レベルで認識されていたことを指摘している(永松2015・2019)。

こうした中世陥し穴について再考する機会となったのが平成21(2009)年9月12・13日に長野県諏訪市・霧ヶ峰高原で開催された総合地球環境学研究所の研究プロジェクト「日本列島における人間-自然相互関係の歴史的・文化的検討」によるシンポジウム「信州の草原-その歴史をさぐる」である。

このシンポジウムでは、生態学、地理学、土壌学、植生史学、林学、文献史学、考古学という様々な分野

の研究者が集まり、信州の草原におけるひとと自然とのかかわりの歴史を討議したものであり、私は八ヶ岳南麓の中世陥し穴について発表する機会をいただいた。なお、このシンポジウムの成果は湯本貴和氏と須賀丈氏の編集でまとめられて出版されている(湯本・須賀2011)

その際の討議で、別府大学教授の飯沼賢司氏は阿蘇下野狩では「窪(くぼ)」で捕まえた鹿は神事には使ってはいけないことになっていただとのご教示を受けた。陥し穴で捕まえる行為は、武士の狩猟としては望ましくないものであったのである。

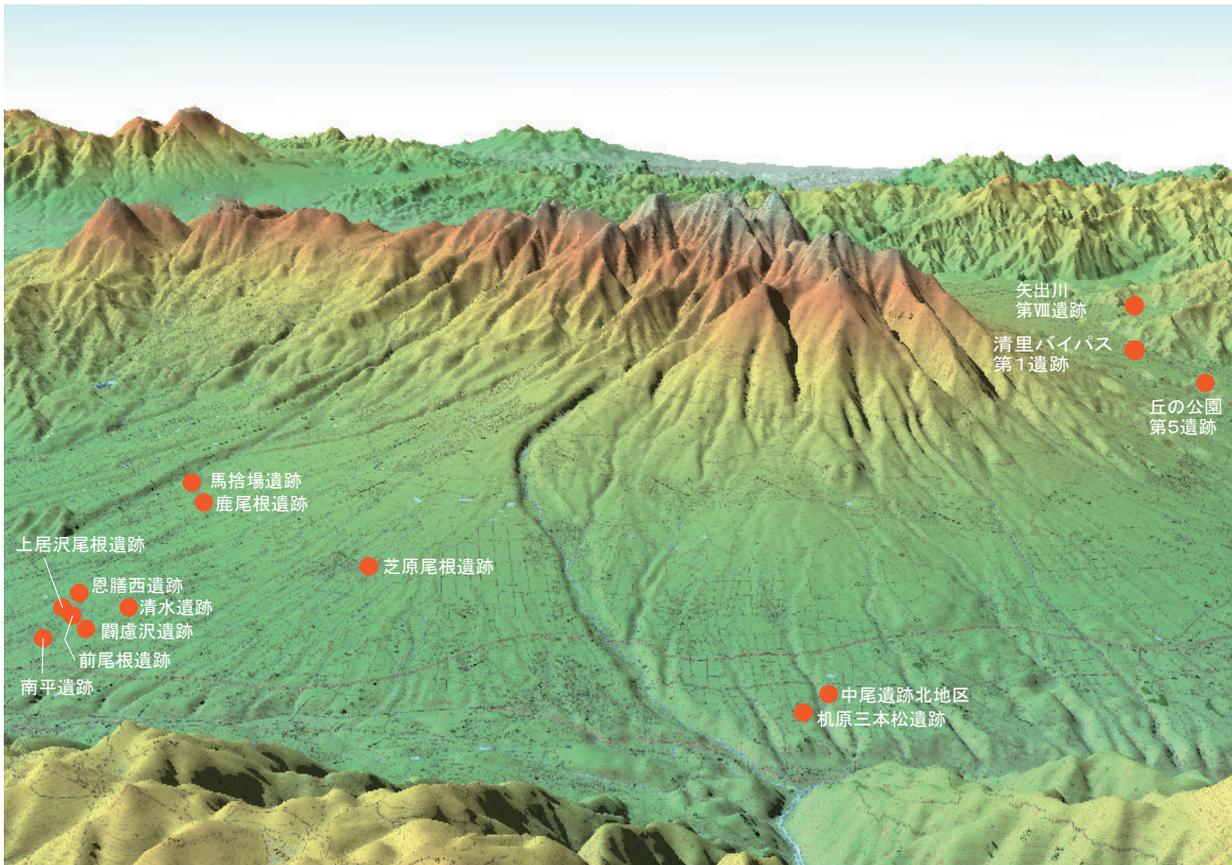
また、中澤克昭氏は『諏訪大明神画詞』が描くような諏訪社の神事の最盛期は12~14世紀であり、頭役を勤仕した武士たちは騎射や鷹犬で鳥獣を捕獲していたといい、中世陥し穴の15世紀~17世紀前半の陥し穴は、その頃にはそうした頭役勤仕の体制が衰退し、武士たちによる狩猟が減少していたが、それでもなお神野で鹿を捕獲しようとしていたことを示すものと指摘された。

こうした指摘を受けて私は再考し、中世陥し穴は15~17世紀前半という武士による狩猟が衰退してきた時期になって、諏訪社の神事のためにシカを狩る必要が求められた武士以外の集団(たとえば農民・神官など)が、次善の策として、神野に陥し穴を構築したものだと考えるに至っている(櫻井2011)。

今回、矢出川第VIII遺跡からも中世陥し穴が確認されたことは、八ヶ岳東麓にも諏訪社の祭礼に用いるシカを捕獲するエリア、「神野」が広がっていたことを示すものであると私は考える。矢出川第VIII遺跡と清里バイパス第1遺跡とは直線距離で3.5km程度離れているにすぎないが、中世の佐久郡からも確認されたことの意義は大きいと私は考えている。

現在、御柱祭は諏訪地域の住民だけが行う祭礼となっているが、中世においては信濃国全体の住民が参加するものであった(笹本1988)。

平安時代末期には諏訪社は信濃国の一宮となっており、それを支えるのは諏訪一族の他にも国府の在庁官人をはじめとする信濃の武士団にまで広がるようになっていたのである。そして、鎌倉時代には諏訪社の祭礼などを執り行い、物的な準備負担もする「頭役」には幕府の命により信濃の地頭・御家人が輪番制であつたという(湯本1986)。



(カシミール3Dにて作成)

図5 八ヶ岳山麓で中世陥し穴が確認された遺跡

中澤克昭氏は、15世紀以降、諏訪社の神事、特に五月会・御射山祭は衰退しはじめ、上社・下社及び上社内部での争いが続き、神事・祭礼は行えなくなっており、その後、武田信玄が復興を命じたことにより社殿の造営、御柱、頭役の奉仕などは再び信濃一国が担う大規模なものになったという。また、16世紀には神野のタブーがゆるみ、耕地開発が行われていたことも指摘する(中澤 2011)。

佐久郡でも望月氏をはじめ滋野一族は神氏を名乗って諏訪一族(神党)に属するようになり、中世の佐久郡においても諏訪社の祭礼への参加や負担がなされていた。祭の頭役は信濃国の地頭・御家人を14組に分けて担当させたが、諏訪上社の頭役下知状には佐久郡でも大井荘・伴野荘の他、多くの郷村の名前がみられる(井出 1982)。

信濃のみならず、源頼朝が諏訪社を崇敬したことから、鎌倉武士の間にも諏訪信仰が広まっていた。鎌倉幕府の御家人は下社の御射山祭に多数が参加しており、諏訪市に今も残る旧御射山遺跡はその祭事の跡で

ある。

室町幕府も三代将軍義満が諏訪上社の神領を承認し、五月会・御射山祭や花会に際しては、信濃の諸在郷に頭役を割り当て、その勤仕を命じている(矢崎 1987)。

中世の佐久においても諏訪社との強いつながりが指摘される。矢出川第Ⅷ遺跡の所在する南牧村に隣接する小海町には平安時代頃に創建されたという松原諏方神社があり、同じく隣接する川上村と南相木村にまたがる御陵山にある祠には諏訪社の神事に用いられる薙鎌が112点も収められていた(藤森 2007)。

これらは16～19世紀のものともみられ、他の鉄製品(剣形・刀形・弓形・矢形・容器形等)などととも計942点が「南相木村の山の神奉斎品」として長野県有形民俗文化財に指定されている。

松原諏方神社には14世紀頃に作成された『伊那古大松原大明神縁起』がある。この冒頭には諏訪大明神の御正体が佐久郡伴野荘の伊那古の松原に飛移ってきたことが告げられている。松原湖は諏訪湖に見立てら

れ、上社・下社が祀られており、中世以来の古態を彷彿させる御射山神事が伝えられている。戦前までは旧三月酉の日の祭礼が執り行われ、75頭の鹿や猪の頭が神膳に供えられていたという（二本松 2019）。

このように中世においては諏訪社の祭礼を信濃全体で担っていたこと、そのなかでも隣接する佐久は諏訪信仰が相当な広がりをもっていたことが理解できよう。そして、矢出川第Ⅷ遺跡のある野辺山高原は八ヶ岳南麓から続く諏訪社の祭礼に用いるシカの狩猟場であったことを示していると私は考える。この野辺山高原周辺には同様な中世陥し穴が他にも存在しているとみてよいであろう。

「諏訪郡諸村並旧蹟年代記」には諏訪社の「神野」は「東は八ヶ岳、西は宮川、北は柳川、南は立場川」と記している（原村 1985）。このうち立場川以南の富士見町や山梨県北杜市にも中世陥し穴が分布していることから実際にはそれよりも広い範囲であったことが推測されているが（櫻井 2011）、「神野」はさらに八ヶ岳東麓まで広がっていたことが指摘できるのではないだろうか。私は「八ヶ岳型中世陥し穴」として理解すべきであると考えている。矢出川第Ⅷ遺跡における中世陥し穴の発見は多方面にわたる研究に重要な資料となるといってよいだろう。

6 今後の課題

陥し穴というと、縄文時代のイメージが強い。実際、縄文時代のものが多いことは間違いないが、静岡県や神奈川県、鹿児島県では旧石器時代の陥し穴が確認されている（堤 2011）。

石田真氏は、東京都多摩ニュータウン NO740 遺跡で古墳時代中期から平安時代初期のものが、栃木県登谷遺跡でも平安時代のものがみられることを整理し、群馬県でも長野原町を中心とした北西部で弥生時代以降に位置づけられる陥し穴が4遺跡から確認されていることを指摘している（石田 2004）。

多くは円形、楕円形、長方形の平面形を呈するものであるが、立馬Ⅰ遺跡では溝状の陥し穴も4基みつかっており、これらは平安時代以降の所産とみられている（群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006A）。この溝状陥し穴の底面に打ち込まれた逆茂木の先端は南平遺跡の事例と同様に、角錐状に鋭く削られているものであるという（石田 2004）。

平安時代以降に位置づけられる同様な溝状陥し穴は立馬Ⅱ遺跡でも3基が確認されている（群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006B）。このうち立馬Ⅰ遺跡17区29号土坑は、10世紀前半の堅穴住居跡を壊し、1108年に発生した浅間山の「天仁の大噴火」による浅間B軽石層が埋土に確認されることから構築時期は10～12世紀に比定できるという。これらを八ヶ岳型中世陥し穴のプロトタイプとみてよいのかどうかは気になるのである。立馬Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡では平安時代以降の陥し穴が49基みられたが、溝状陥し穴は7基にすぎなかったことをどうみるか。機能的にシカを捕獲するための陥し穴は形態的に類似するものになるのか。あるいは八ヶ岳山麓にみられるものと同様に諏訪社の祭礼とかかわり合いをもつものであるのか。これらは今後の課題としたいが、最後に群馬県での諏訪信仰の広がりについて付記しておきたい。

諏訪信仰という観点からみると、島田裕巳氏によれば『全国神社祭祀祭礼総合調査』で諏訪神社は全国に2616社あり、全体の第6位の数であるといい、別の調査では諏訪神社の分社は全国に5590社あるとされ、摂社・末社を合わせれば1万社を超えるという（島田 2014）。武光誠氏が紹介する諏訪社の都道府県別数では、新潟県が1654社で一番多く、次いで長野県が1203社である。そして3番目が群馬県で432社であるという（武光 2012）。

また、大島由紀夫氏は『上野国神名帳』の群馬県西部の条には「従三位諏訪若御子明神」とあり、当地方に奉祀された諏訪神が有力神としてすでに認識されていたことがうかがえると指摘し、『神道集』において上野国の神々の縁起を叙述するにあたっては諏訪明神と上野国の神々の深い関係があることを論ずる（大島 2015）。

このように群馬県、特に北西部には諏訪信仰が深く浸透していたことはうかがえよう。

私は八ヶ岳山麓にみられる中世陥し穴は諏訪社の祭礼と深い関連性があるものとみているが、立馬Ⅰ・Ⅱ遺跡での溝状陥し穴をどうとらえていくべきか。今後、多方面から追求していきたいと考えている。

註

1) 逆茂木を単に打ち込んでいるものは縄文時代の陥し穴にも認められるが、これらは細く顕著な加工痕のないものであるの

に対して、断面断ち割りを行った原村の南平遺跡では、先端を角錐状に鋭く尖らせた逆茂木を打ち込んでいることに特徴があり、その区別を明確にするために私は「南平式打ち込み型」として呼称し、中世陥し穴の大きな特徴のひとつと理解している。なお、南平遺跡では逆茂木の一部が炭化した状態で見つかったものもみられ、打ち込む前に火にかけていたことがわかる。腐食を防ぐためであろうか。これも興味深い知見である。

引用参考文献

- 石田真 2004 「群馬県北西部における陥し穴の構築時期をめぐって」『研究紀要 22 一創立 25 周年記念論文集一』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 井出正義 1982 「鎌倉時代」『図説・佐久の歴史 上』郷土出版社
- 大島由紀夫 2015 「「神道集」の中の諏訪と上州」福田昭他編『諏訪信仰の中世』三弥井書店
- 金井典美 1968 『御射山』学生社
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006A 『立馬Ⅰ遺跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006B 『立馬Ⅱ遺跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 200 『立馬Ⅲ遺跡』
- 櫻井秀雄 1998 『南平遺跡発掘調査概報』原村教育委員会
- 櫻井秀雄 2000 「原村、南平遺跡にみられる陥し穴の年代」『信濃』52 巻 10 号、信濃史学会
- 櫻井秀雄 2006 「八ヶ岳南麓の中世陥し穴」『金沢大学考古学紀要』第 28 号、金沢大学考古学研究室
- 櫻井秀雄 2011 「八ヶ岳山麓・霧ヶ峰周辺における縄文・中世の陥し穴」湯本貴和・須賀丈編『信州の草原』ほおずき書籍
- 笹本正治 1988 「諏訪大社と御頭」『図説 長野県の歴史』河出書房新社
- 島田裕巳 2014 『なぜ八幡神社が日本でいちばん多いのか』幻冬舎
- 武光誠 2012 『諏訪大社と武田信玄』青春新書
- 寺田鎮子・鷲尾徹太 2010 「諏訪明神」岩田書店
- 堤 隆 2011 『列島の考古学 旧石器時代』河出書房新社
- 中澤克昭 2011 「狩猟神事の盛衰」湯本貴和・須賀丈編『信州の草原』ほおずき書籍
- 長野県埋蔵文化財センター 2017 『矢出川遺跡群 矢出川第Ⅷ遺跡』
- 永松敦 2015 「中世諏訪の狩猟神事」福田昭他編『諏訪信仰の中世』三弥井書店
- 永松敦 2019 「諏訪信仰における野焼きと集団狩猟」『諏訪信仰の歴史と伝承』
- 二本松康宏 2019 「諏訪縁起の再創生」『諏訪信仰の歴史と伝承』三弥井書店
- 原村 1985 『原村誌 上巻』
- 平出一治 1998 『關廬沢遺跡』原村教育委員会
- 藤森英二 2007 「御陵山」『佐久考古通信 N o 99・100 佐久の遺跡』佐久考古学会
- 宮坂光昭 1992 『諏訪大社の御柱と年中行事』郷土出版社
- 矢崎孟伯 1986 『諏訪大社』銀河書房
- 矢崎孟伯 1987 「大六章 室町・戦国時代の文化 第二節 寺社信仰の発展 二 諏訪信仰の普及と郷村」『長野県史通史編 第三巻 中世二』長野県史刊行会
- 山梨県埋蔵文化財センター 1997 『清里バイパス第 1 遺跡 清里バイパス第 2 遺跡』
- 湯本軍一 1986 「第四章 幕府政治の発展と信濃 第二節 北条氏と信濃 二 諏訪社の支配」『長野県史通史編 第二巻 中世一』長野県史刊行会
- 湯本貴和・須賀丈 2011 『信州の草原—その歴史をさぐる』ほおずき書籍